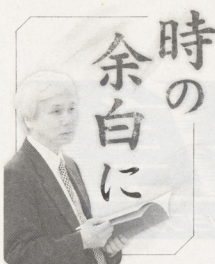


前回書いた寛次郎さんの「自立した百姓暮らし」には、読者からさまざまな共感の声が寄せられました。

「物にまみれた生活を反省した」「農の大切さを改めて考えさせられた」「変わらなくても生きていける生活、本当にそう思う」等々。

直ちに同様の行動はとれなくても、複雑化した時代のなかで生活を簡素にしたい、単純な原理によって生きたい、そのためのヒントを得たい、と願っている人は少なからずいるというところでしょう。

寛さんは学者の道から百姓暮らしに飛びこんだ方です。農業の経験はなかった。そこから始めて少しずつ体の動かし方を体得し、畝立ても田の畦塗りも当初の倍以上の速さでできるようになります。



編集委員 芥川 喜好

自立した生のために当然引き受けなければならない肉体仕事がある。それを苦痛と感じない体をつくること、自らを鍛えることと寛さんは言っています。

そうした自己修練、自己教育こそ自立への道のりです。

寛さんはまた「他者を打ち負かして苦しみなければ得られない発展などない方がいい」「競争は人間の宿命ではない」とも言っています。

他の誰のものでもない、自身一回限りの生です。「より良く」生きるには、実際、人との競争にかまけている暇などないのかもしれない。



当方もまた、世のなか競争とも勝負とも思わないし、そういう風にもし生きてきませんでしたが、担当する美術の分野でも自分なりの確かな行き方をしている作家に目がいきます。流れに乗じて群れる人々は視界から没して行きました。

団塊、などと本意にも呼ばれてきた年代です。残り時間を考えれば、真率な構えでひとり自分のなすべきことに向きあってきた人の仕事こそ、つきあう

群れを遠く離れて



「はまなす」

丹阿弥 丹波子

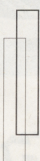
◆丹阿弥丹波子銅版画展が、5月13日から30日まで大阪市中央区平野町4の6の15のギャラリーブチフォルムで開かれます。

に足る。それが実感です。この春、久しぶりに早川俊二さん59の世界に浸りました。

パリに住み、2、3年ごとに日本で開催を開いて、そのつど深化する画面がファンを瞠目させてきた独立独歩の油彩家です。97年12月の日曜版で紹介したことがあります。

その3年ぶりの発表があり、一貫して手がけてきた人物と静物をモチーフとする空間が、ある確かな達成感のうちに輝き出しています(5月2日まで、東京・神田錦町のアスクエア神田ギャラリーで)。

これは文字のコラムで申し訳ないのですが、少し想像の羽を広げていただきたいと思います。



静穏な空間です。画家はペインティングナイフで丹念に絵の具を重ね、削り、そこに光と影の織りなす存在を浮かびあがらせていきます。それは横たわる女性像だったり、器や果物のある静物だったりします。

見る者は、さわさわと粒たつ空気感のうちに、存在するもののさわめきと鎮まりを、震動を聞きとります。空間が生きている、と感じます。

人間が、ものが、「在る」とは不思議です。早川さんの絵画は自明な形の描写ではありません。いま内から形が生まれてい

る生成の場、在ることの不思議が不思議のままに描かれたひとつの宇宙です(うむ。画廊のホームページで確認いただければ幸いです)。

目に心地よいグレー、白、茶が基調の、どこか懐かしい空間です。モordを超えたところで「描くこと」の根に触れているこの絵画がどのように生まれてきたかが、実は肝心なのです。

東京の美術学校に通い、24歳で渡欧した時は、古典を模写しながら今後を考えようぐらいのつもりだった。しかし実際に接した西洋美術の厚みと奥行きに彼は打ちのめされます。

彼はどうしたか。踏みとどまり、国立美術学校に入り直してデッサンの修練で20代を過ごします。30代、絵の具を自分で作り始めます。技法書で組成を研究しながら、自分が使いやすい、求める抵抗感も気品もある絵の具を開発していきます。40代、ようやく自分なりの油彩が生まれ始めるのです。

近代以降の百数十年、油彩を志した人が西洋画の歴史と伝統に直面していった態度は、さ

ざまです。歴史への理解なしに新しいモードの部分だけを要領よく持ち帰った人もいる。西洋という壁の前に絶望した人もいます。どれも性急でした。

早川さんは絶望もしなければ巧みにすり抜けもしなかった。現実を認識し、事態を受けとめ、対策をとったという。心中必ずしも平穏ではなかったでしょうが、行動としてのこの冷静さは比類のないものです。

自分のやりたいことがある。ならばそれに向かって自らを鍛え、時間に耐え、自分で立つてはならないか。競争などではない、自分自身がそうするのだ——と思ったかどうか、いや、内心そうして自らを鼓舞し続け

たに相違ないのです。ループルがある。それだけの理由で在住35年。玄米と野菜の食事を1日2回、制作と散歩が中心の簡素な日常です。

これから少し自分なりの方向へ飛べるかな、という気がしています。この恐るべき射程の長さこそ、今の日本にはないものです。

同志としての奥さんが日々を支えたことは、忘れずに申し添えなければなりません。

「時の余白に」 群れを遠く離れて

編集委員 芥川 喜好

前回書いた笈次郎さんの「自立した百姓暮らし」には、読者からさまざまな共感の声が寄せられました。

「物にまみれた生活を反省した」「農の大切さを改めて考えさせられた」「変わらなくても生きていける生活、本当にそう思う」等々。

直ちに同様の行動はとれなくても、複雑化した時代のなかで生活を簡素にしたい、単純な原理によって生きたい、そのためのヒントを得たい、と願っている人は少なからずいるということでしょう。

笈さんは学者の道から百姓暮らしに飛びこんだ方です。農作業の経験はなかった。そこから初めて少しずつ体の動かし方を体得し、畝立ても畦塗りも当初の倍以上の速さでできるようになります。

自立した生のために当然引き受けなければならない肉体仕事がある。それを苦痛と感じない体をつくること、自らを鍛えること、と笈さんは言っています。そうした自己修練、自己教育こそ自立への通のりです。

笈さんはまた「他者を打ち負かして苦しめなければ得られない発展など、ない方がいい」「競争は人間の宿命ではない」とも言っています。

他の誰のものでもない、自分自身の一回限りの生です。「より良く」生きるには、実際、人との競争にかまけている暇などないのかもしれませんが。

当方もまた、世のなか競争とも勝負とも思わないし、そういう風にも生きてきませんでしたから、担当する美術の分野でも自分なりの確かな行き方をしている作家に目がいきます。流れに乗じて群れる人々は視界から没して行きました。

団塊、などと不本意にも呼ばれてきた年代です。残り時間を考えれば、真率な構えでひとり自分のなすべきことに向き合ってきた人の仕事こそ、つきあうに足る。それが実感です。

この春、久しぶりに早川俊二さん（59）の世界に浸りました。パリに住み、2、3年ごとに日本で個展を開いて、そのつど深化する画面がファンを瞠目させてきた独立独歩の油彩家です。97年12月の日曜版で紹介したことがあります。

その3年ぶりの発表があり、一貫して手がけてきた人物と静物をモチーフとする空間が、ある確かな達成感のうちに輝き出しています（5月2日まで、東京・神田錦町のアスクエア神田ギャラリーで）。ここは文字のコラムで申し訳ないのですが、少し想像の羽を広げていただきましょうか。

静穏な空間です。画家はペインティングナイフで丹念に絵の具を重ね、削り、そこに光と影の織りなす存在を浮かびあがらせていきます。それは横たわる女性像だったり、器や果物のある静物だったりします。見る者は、さわさわと粒だつ空気感のうちに、存在するもののざわめきと鎮まりを一震動を聞きとります。空間が生きている、と感じます。

人間が、ものが、「在る」とは不思議です。早川さんの絵画は自明な形の描写ではありません。いま内から形が生まれている生成の場、在ることの不思議が不思議のままに描かれたひとつの宇宙です(うむ。画廊のホームページでご確認いただければ幸いです)。

目に心地よいグレー、白、茶が基調の、どこか懐かしい空間です。モードを超えたところで「描くこと」の根に触れているこの絵画がどのように生まれてきたかが、実は肝心なのです。

東京の美術学校に通い、24歳で渡欧した時は、古典を模写しながら今後を考えようぐらいのつもりだった。しかし実際に接した西洋美術の厚みと奥行きに青年は打ちのめされます。

彼はどうしたか。踏みとどまり、国立美術学校に入り直してデッサンの修練で20代を過ごします。30代、絵の具を自分で作り始めます。技法書で組成を研究しながら、自分が使いやすく、求める抵抗感も気品もある絵の具を開発していきます。40代、ようやく自分なりの油彩が生まれ始めるのです。

近代以降の百数十年、油彩を志した人が西洋画の歴史と伝統に直面してとった態度は、さまざまです。歴史への理解なしに新しいモードの部分だけを要領よく持ち帰った人もいる。西洋という壁の前に絶望した人もいる。どれも性急でした。

早川さんは絶望もしなければ巧みにすり抜けもしなかった。現実を認識し、事態を受け止め、対策をとったのです。心中必ずしも平穏ではなかったでしょう。が、行動としてのこの冷静さは比類のないものです。

自分のやりたいことがある。ならばそれに向かって自らを鍛え、時間に耐え、自分で立つしかないではないか。競争などではない、自分自身がそうするのだ—と思ったかどうか。いや、内心そうして自らを鼓舞し続けたに相違ないのです。

ルールがある。それだけの理由で在住35年。玄米と野菜の食事を1日2回、制作と散歩が中心の簡素な日常です。

「これから少し自分なりの方向へ飛べるかな、という気がしています」。この恐るべき射程の長さこそ、今の日本にはないものです。

寛さんの場合と同様、強力な同志としての奥さんが日々を支えたことは、忘れずに申し添えなければなりません。